OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	山形市方言の文末詞ジェ ： ヨ・ズ・バと対比して
Author(s)	渋谷, 勝己
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2008, 8, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23216
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第8号（2008年3月）1-13

山形市方言の文末詞ジェ
—ヨ・ズ・バと対比して—

渋谷　勝己

【キーワード】山形市方言、新規情報伝達、ジェ、聞き手の思い込み、修正

【要旨】

本稿では、山形市方言の文末詞ジェを取り上げて、その用法を以下のように記述する。

(a) ジェは、平叙文のみに後接し（§2.1）、文中では、テンス形式のタや報告形式ケのあとの位置に、またハなどの汎用の文末詞に先行して現れる、聞き手への伝達態度を表すモダリティ形式である（§2.2）。

(b) ジェの働きは、[[命題]＋ジェ]のなかの[命題]で示される知識や情報が、聞き手が誤って認識しているものとは異なる正しい知識や情報であるとして、聞き手に提示するところにある。聞き手の思い込みを修正するといった発話機能を担うことが多い（§3）。

(c) 平叙文に後接して、聞き手に新規情報を伝達する他の文末詞（ヨ・ズ・バ）等とは、会話のなかで意味的に類似するケースもあるが、互いに異なった機能を担っている（§4）。

1.　はじめに

1.1.　目的

山形市方言には、聞き手の知らない情報を聞き手に伝えるときに用いられる、共通語の「よ」に相当する文末詞がいくつかある*。次のようなものである（作例については、議論に関連する、あるいは共通語の形式では表しにくい当該方言形式のみをカタカナで記し、他は理解の便を考えて共通語で記す。*はその文が不適格であることを、?はやや不自然であることを、??はかなり不自然であることを表す。また、#はその文（発話）がそのコンテキストや発話連鎖、場面では不適切であることを表す。以下同様）。

(1) 太郎はさっき自分の部屋にいたケ｛ジェ／ヨ／ズ／バ｝（ケは報告、渋谷1999a）

このうちヨは間投助詞としても用いられるが、そのほかの形式は文末でのみ用いられる。

(2) そして｛*ジェ／ヨ／*ズ／*バ｝、きのうの8時ごろに｛*ジェ／ヨ／*ズ／*バ｝、
そこに｛*ジェ／ヨ／*ズ／*バ｝、太郎が来て｛*ジェ／ヨ／*ズ／*バ｝、.....

本稿ではこれらの形式のなかからジェ（ジェーと長呼されることもある）を取り上げて、その用法について、ヨやズ（渋谷2000）、バ（渋谷2004）のもつ用法と対比しつつ記述することを目的とする。

* 本研究は、平成19年度文部科学省科学研究費基盤研究（C）「山形市方言における動詞述語文の記述的研究」（代表者：渋谷勝己、課題番号19520395）による。

1.2. データ

本論の分析には、山形市生え抜き話者（2007年11月の調査時点で75歳の男性と72歳の女性）の自然談話から自然傍受法によって採集したジェの用例を参照しつつ、主に、当該方言の母語話者である筆者の内省によって作成したデータを使用する。

山形市方言の文末詞には、山形市を離れてほぼ30年になる筆者（1959年山形市生まれ。18歳まで山形市に在住、以後24歳まで東京、その後現在まで大阪）でも容易に内省できるものとそうでないものがある。ジェは比較的内省がしにくいものであるが、このことは使用頻度と関係するかもしれない。上記2名の生え抜き話者の自然談話のうち、録音を行った1時間ほどのなかではジェは用いられず、国立国語研究所（1978）の談話データ（山形市の北方約20kmの河北町谷地で収録）にもジェの用例は見当たらなかった。これは、ジェが当該方言のなかで衰退しつつあるというよりも、以下に示すように、ジェが聞き手の思い込みを修正するという働きをもっていることによるものと思われるが、いずれにしても、会話のなかで比較的多用されるズなどとくらべると著しい特徴である。なお、以下、ジェの用法を分析する際に比較の対象としたズとバは、適格性判断、作例ともにジェよりもしやすいものであったが、ヨの一部の用例については、それが方言の例なのか共通語の例なのか、迷うところがあった（§4.1の当該箇所にその旨を記した）。

以下、文末詞ジェについて、他の文末詞や文タイプとの共起制限（§2）、ジェの意味・機能（§3）、ヨ・ズ・バとの異同（§4）の順に記述を進めることにする。

2. 共起する文タイプなど

最初に、文末詞ジェが使用可能な文タイプ（§2.1）と、ジェと他の文末詞との相互承接のありかた（§2.2）の2点を確認しておこう。

2.1. 文タイプなど

本稿で比較の対象とするヨやズは共起する文タイプに制限のない汎用の文末詞であるが、ジェとバの使用は次のように平叙文に限られる（文末詞が長呼されるかどうかは語用論的な問題である。渋谷2008参照）。

(3) 明日雨だ｛ジェ／ヨ／ズ／バ｝（平叙文）
(4) 明日雨なんか降るか｛*ジェ／ヨー／ズー／*バー｝（YES-NO疑問文）
(5) おれ、いつそんなこと言った｛*ジェ／ヨー／ズー／*バー｝（疑問詞疑問文）
(6) 早く行け｛*ジェ／ヨ／ズ／*バ｝（命令文）

ジェは、話し手のもっている知識・情報を聞き手に伝えるときの、伝え方にかかわるモダリティ形式であるということができる。

2.2.　他の文末詞等との共起関係

ジェは、たとえば、次のような形式と共起して使われることがある。

(7) 来た＋ミデダ＋ケ＋ジェ＋ハ

ミデダは共通語の「みたいだ」相当形式、ケは回想・報告・過去（渋谷 1999a）を表す。また、ハは、平叙文に付加した場合、話し手が観察した動的事態が話し手の予測や期待とは異なる方向に動いたものであるということを表すものである（渋谷 1999b）。報告や過去を表すケは南（1974）のいうC類従属節に入るが、ジェ以下の形式は入らない。ジェは聞き手目当てのモダリティ形式であり、必ず聞き手が必要である。

なお、ジェとヨ・ズ・バは、互いに共起することはない。

(8) *あの人、もう来たミデダケ｛ジェヨ／ヨジェ｝ハー

(9) *あの人、もう来たミデダケ｛ジェズ／ズジェ｝ハー

(10) *あの人、もう来たミデダケ｛ジェバ／バジェ｝ハー

3.　ジェの意味

以下、本節では、最初にジェの基本的な意味（§3.1）をまとめたあと、ジェが使用できない場合（§3.2）と、ジェの担う語用論的な意味（§3.3）を整理することによって、ジェのもつ意味・用法を明らかにすることを試みる。

3.1.　基本的用法

山形市方言の文末詞ジェは、先行するモーラよりも低く付く（無標）、あるいは先行するモーラよりも高く付いてジェの拍内で大きく下降する（有標）というイントネーションをとって、次のような用法を担う形式である。

(11) ［［命題］＋ジェ］のなかの［命題］が表す知識や情報が、聞き手のもっているものとは異なる正しい知識・情報であるとして、聞き手に提示する。

したがって、ジェを使用した発話は、会話のなかでは、

(12) 話し手が、聞き手の発話や行為から伺われる、聞き手の抱いている前提や思い込みが誤りであると判断し、その思い込みを修正しようとする。

といった発話意図を担うことが多い。上に記した有標のイントネーションをとった場合には、聞き手の思い込みにたいして強く反論する発話になる。

以下、隣接ペアの第二発話部で使用される場合と（§3.1.1）、第一発話部で使用される場合（§3.1.2）の二つにわけて、その用法を整理する。

3.1.1.　第二発話部で使用される場合

まず、第二発話部で使用される場合には、次のような例がある。

(13) 子ども：あの鉄人28号の人形、買って

母親　：あれはジャイアントロボの人形だジェ。いいの？

母親の発話は、子どものもっている、人形が鉄人28号であるという思い込みを修正することを意図してなされたものである。同様にして、

(14) A：庭を掃除してって言ったでしょ？

B：おれ、ちゃんとやったジェ

の会話では、Bは、Bはまだ掃除をしていないというAの思い込みをうち消すことを意図して、ジェを使用している。

また、この、聞き手の思い込みの内容は、話し手の推論によって導きだされるもので、会話のなかで明言されていないものでもよい。たとえば、

(15) A：(靴をはきながら) さあ、帰ろうか

B：その靴、おれのだジェ

(16) A：あした、釣りにでも行こうかな

B：あした雨だジェ

(17) A：おまえ、あした学校なんだから早く寝なさい

B：あしたは日曜日だジェ

といった例では、Aが履こうと思っている靴がAのものであるとしてAは疑っていない、あるいは、Aは明日は晴れだと思っている、Aは明日は平日だと思っている、と、Bが推測し、その思い込みが間違いであるとAに伝えるために、ジェを使用している。

3.1.2. 第一発話部で使用される場合

以上、§3.1.1 であげた例は、すべて隣接ペアの第二発話部でジェが使用された場合であるが、ジェは第一発話部で使用されることもある。たとえば、

(18) そういえば、きのう七日町に行ったら、あいつ、彼女連れて歩いてたッケジェ

といった例である。この発話は、「あいつ」(に関連すること) がすでに話題になっているという会話の進捗状況のもとで、「あいつ」についての新たなサブトピックを導入する第一発話部として使用されたもので、話し手は、これまで聞き手とのあいだに蓄積された共有知識や共有情報・共有体験 (以前、「あいつ」のことが話題になり、そこで行き着いた「あいつには彼女がいない」という結論など) をもとにして、「あいつには彼女がいない」と聞き手は今でも信じていると判断した上で、当該情報を聞き手に伝達している。したがって、当該発話は、表面上は第一発話部として会話のなかに現れているが、潜在的には、第二発話部として、

(19) 聞き手の保持する共有知識 (A)：あいつには彼女はいない

B：きのう七日町に行ったら、あいつ、彼女連れて歩いてたッケジェ

のように、これまでの共有知識 (未だに聞き手が抱いている思い込み) に修正を要求する発話と位置づけることができるものである。

この、ジェが第一発話部で使用される場合にはその前提として聞き手とのあいだに共有された情報や体験があるということは、次のような例からもうかがうことができる。

(20) A：おまえ、珍しい人が来るから待ってろと言ったけど、誰も来ネケジェ（来なかったよ）
　　B：あれっ、そうだった？　おかしいなあ

この場合、この会話に時間的に先行して行われた二人の会話のなかでなされた、聞き手の「珍しい人が来るから待ってろ」という発話が共有体験（第一発話部）であり、ここではその共有体験が発話のなかで明示的に言及されている。この発話におけるジェは、実質的には第二発話部として、聞き手のその「珍しい人が来る」という知識や思い込みが誤りであったということを、時間を隔てて聞き手に提示しているものである。また、第一発話部として、

(21)（子どもが戸棚のなかのまんじゅうを探している様子を見て母親が）あのまんじゅうはさっきあんたが食べてたケジェ

のように自発的になされた発話も、二人のインターアクションのなかでは、次の隣接ペアの第二発話部と同じ役割を果たしている。

(22) 子ども：お母さん、まんじゅうが見つからないよ
　　母親　：あのまんじゅうはさっきあんたが食べてたッケジェ

3.1.3.　補足2点

以下、ジェの用法について、2点、補足する。

(a) 補足1：話し手と聞き手のどちらの認識が正しいか

ジェが後接する文の命題は、あくまでも話し手が正しいと判断するものであり、それが実際に正しいかどうかということとは別である。たとえば、次の例では、Aが、二つめの発話において、Bの認識のほうがむしろ誤りであることを、ジェを使用して述べている。

(23) A：（靴をはきながら）さあ、帰ろうか
　　B：その靴、おれのだジェ
　　A：何言ってるんだ。これはおれのだジェ。おまえのはそこにあるじゃないか

(b) 補足2：強い修正要求と弱い修正要求

これまであげてきた例は、聞き手の思い込みを、あからさまに、別のものに修正するよう要求するものが多かった（強い修正要求）。しかし、ジェにはまた、

(24) A：おまえ、あしたどうする？　いっしょに遊園地行く？
　　B：行かないよ
　　A：あの子も行くんだジェ。どうする？

のように、会話の様子から、聞き手が（おそらく高い確率で）誤って思い込んでいると判断される事態（上の例では、「あの子は遊園地に行かない」こと）について、情報を追加し

て提示するというかたちで、聞き手の（もしかしたら）誤った思い込みを修正しようともくろむような用法もある（弱い修正要求）。

ただし、当該発話が、聞き手の思い込みの修正を強く要求するものか、それとも可能性が疑われる誤った思い込みを修正するための情報を念のため追加提示するだけのものなのかは文脈に依存することで、ジェに二つの別の用法があるというわけではない。

3.2. ジェが使用できない場合

次に、ジェの用法をさらに浮き彫りにするために、ジェが使用できない場合とジェの担う語用論的な意味を整理することにしよう。後者については、項を改めて§3.3 でまとめることにし、ここではジェが使えない場合をいくつかあげる。網羅的な整理ではない。

(a) 独り言

まず、ジェは聞き手の思い込みを修正するために使われる形式であるので、その思い込みを修正する相手のいない独り言では使用することができない。

(25) (独り言で) あいつどうかしている {#ジェ／ナア}

(26) (独り言で) しかしいい天気だ {#ジェ／ナア}

(b) 発見

関連して、たとえば話し手と聞き手がいっしょに歩いていて、二人が、二人ともそこにいることをまったく予想していない誰か／何かを同時に見つけたような場合(発見)には、ジェを使用することができない。

(27) あっ、あんなところに太郎がいる {*ジェ／Ø}

(28) あっ、つくしだ {*ジェ／Ø}

(c) ナラティブにおける状況説明

聞き手に話し手自身の体験を伝えようとするナラティブの冒頭で、その体験の生じた場所や時間などの状況説明を行うような場合には、聞き手になんらかの思い込みがあることを想定することはないために、ジェは使用できない。

(29) きのう、七日町に行ったんだけど、そこで太郎に会ったんだ {#ジェ／Ø}

(30) この前、用事でちょっと仙台まで行ったんだ {#ジェ／Ø}

(d) 相手の質問（情報要求や勧誘など）に答える場合

相手の情報要求や勧誘に答える場合にも、相手の事前の思い込みを想定する状況ではないために、ジェが使用されることはない。

(31) A：(テレビで天気予報を見ていた人に) あしたの天気、何？
　　B：雨 {#ダジェ／Ø}

(32) A：君、いつ東京に行くの？
　　B：あした {#ダジェ／Ø}

(33) A：あしたみんなで映画を見に行くけど、君も行かない？

B：行かない {#ジェ／Ø}

3.3.　ジェのもつ語用論的意味

次に、ジェのもつ語用論的な意味をいくつか取り上げて、整理してみよう。

(a) 非丁寧さ

ジェの基本的な用法は、聞き手の思い込みを修正するというものである。これは、聞き手のもつポジティブフェースをつぶす行為であるから、ジェを用いた発話はもともと丁寧さに欠けるところがある。したがって、方言による会話を行うことができる間柄であっても、親子や親しい者同士、あるいは目下に向けてでないと使用しにくい。

(34)（今度の休日の過ごし方を話題にして）

父親　：よーし、今度の日曜日は猪苗代湖までドライブにでも行くか

子ども：日曜日は雨だジェ

(35)（高校の部活で、練習の場所を話題にして）

先輩：よーし、今日はこれまで。あしたはグランドで練習だ

後輩：あしたは雨だ {#ジェ／??ジェッス／ッス}（ッスは丁寧語）

ちなみに、(35) の例に見るように、ジェは丁寧語のッスと共起しないが、それは、ジェの非丁寧さとッスの丁寧さが互いに衝突するという語用論的な理由によるものと思われる。かなり不自然ではあるが、後輩がどうしても先輩の思い込みを修正したいと思っている場合には、次のように、使用できないことはない。したがって、文法的に不適格というわけではないようである。

(36) 先輩：おまえ、なんできのう練習を休んだんだ

後輩：いえ、きのう、ちゃんと学校に来たんだけど、体育館が開いていなかったんだケッス

先輩：言い訳言ってもだめだ

後輩：本当だッス！　本当に開いてなかったんだケ {?ジェッス／ッス} ！

(b) 話し手による出来事の意外性の演出

§3.1.2 の例 (18) と関連して、ジェは、

(37) あの人、忙しいのにきのうわざわざ来てくれたんだケジェ

の例のように、「あの人」のことがすでに話題になっているという状況のもとで、「きのう来てくれた」という、新たなサブトピックを導入するのに使用されることがある。この場合のジェは、会話のなかでストラテジックに使用されたものである。ここで話し手は、聞き手の実際の考えとは別に、聞き手の「忙しいあの人がきのう来るはずがない」という思い込みを仮想的に作り出しており、ジェによってその思い込みが誤りであると述べることによって、その出来事の意外性をいわば演出しているのである。

4. 他の文末詞との異同

以上、ジェの意味・用法を確認したところで、本節では、ジェと、当該方言には聞き手の知らない情報を聞き手に伝えるときに用いられる、共通語の「よ」に相当する文末詞がいくつかあるとして§1.1 であげたヨ・ズ・バのあいだの違いについて、ごく簡単にまとめておこう。以下、ヨとズについては渋谷（2000）、バについては渋谷（2004）の記述を一部修正して要約する。なお、これらの 4 つの形式の分布面での特徴を再度確認しておけば、以下のようである。

(a) ヨは間投助詞としても用いられるが、他の 3 形式は文末でしか用いられない。

(b) ヨとズは命令文や疑問文でも用いられる汎用の文末詞であるが、バとジェは平叙文でしか用いられない。

(c) 上記 4 形式は、いずれも、ひとつの文の末尾において互いに共起することはない。

以下では、これらの文末詞が平叙文の文末で用いられた場合のみを取り上げる。

4.1. ジェとヨの異なり

当該方言におけるヨの用法は、共通語のそれよりも狭い。以下、日本語記述文法研究会編（2003: 242-244）のあげる「よ」の用法を音調の種類によって分類した枠に拠りつつ、ジェとの違いを示せば、次のようになる。§4.1.1 でヨが上昇調をとる場合、§4.1.2 で下降調をとる場合を取り上げる。

4.1.1. ヨが上昇調をとる場合

まず、ヨは、前接形式の最終音節よりも若干低い位置からはじまってヨの拍内で上昇するというイントネーション（以下、「↑」で示す）をとり、共通語の「よ」と同じように、ヨに先行する命題の内容を、聞き手が知っているべき情報として、聞き手に示すという伝達態度を表す（上掲書 242 ぺ）。

(38) あっ、ハンカチ落とした {#ジェ／ヨ↑}

(39) (父親が子どもに) ほら、ケーキ買ってきてケダ {#ジェ／ヨ↑} (ケダ＝くれた、共通語の「買ってきてあげた」相当。この例は、渋谷 2004:172 で不適格としたが、修正する)

(40) 妻：きのう市役所に行ってくれた？
夫：うん、住民票もらってきた {#ジェ／ヨ↑}

上の 3 つの例のように軽く伝えようとする場合もあれば、次のように非難するようなニュアンスを加えて強く伝達する場合もある。

(41) きのうなんで来なかったの？ みんなおまえを待っていたんだケ {ジェ／ヨ↑}

例 (38) ～ (40) は、いずれも当該情報をもっていない聞き手にその情報を伝えるもので、聞き手の思い込みを前提とするものではないためにジェは使用できない。一方、(41) の例

については、「みんながおまえを待っていた」ということを知らない聞き手に、知るべき情報として提示しようとする場合にはヨが使用され、話し手が、聞き手は「きのうは何も約束はしていなかった、きのうみんなが自分を待っていたはずはない」と思い込んでいると判断して、その思い込みを修正しようとする場合にはジェが使用される。ヨの場合、§3.3の（35）の例と異なって、丁寧語のッスと共起することもある。

（42）先輩、きのうはみんな先輩を待っていたんだケ｛??ジェッス／ヨッス↑｝

なお、ヨは、上昇イントネーションのもつ聞き手目当て性とあいまって、聞き手から何らかの反応を引き出すことをもくろむといった機能をもつ場合も多い。たとえば、

（43）おい、きのう、おまえと友子が霞城公園を歩いているところ見た｛#ジェ／ヨ↑｝

のように、話し手が新たな話題を切り出す場合に用いられたときには、「そこで何をしていたのか」「友子とどういう関係なのか」といったことへの回答を聞き手に同時に要求している。このような場合には、ジェは使用できない。

以上、この用法でのヨは、聞き手の思い込みを修正するといったところとは異なった目的をもつ発話のなかで使用され、ジェとは用法を異にしている。

4.1.2.　ヨが下降調をとる場合

（a）一方、共通語のもつ、「よ」が下降調をとって（以下、「↓」で示す）、聞き手に新規情報を伝達するような用法は、当該方言のヨにはない。

（44）子：このお人形さん、なあに？
　　親：これはおまえへのプレゼントだよ↓（共通語例）

（45）部下：あれ、部長でもおもちゃ屋に行くことなんてあるんですか？
　　部長：いや、めったに行かないんだけど、きょうは息子の誕生日なんだよ↓（共通語例）

（46）A：あれっ、なんであんなところに太郎がいるんだ？
　　B：きっと買い物にでも行くんだよ↓（共通語例）

（47）きのう、駅でめずらしく太郎にあったんだよ↓。そしたら飲みに行こうかということになって、新しい店に入ったんだよ↓（共通語例、ナラティブの「よ」）

このような場合には当該方言では、文末詞を用いないか（例（44）（45））、推量の「べ」（例（46））、あるいは§4.2にあげるズを用いる（例（47）、渋谷 2000: §4.2）のがふつうである。聞き手の思い込みを修正するといったものではないので、ジェは使用できない。

（48）子：このお人形さん、なあに？
　　親：これはおまえへのプレゼントだ｛#ジェ／Ø｝

（49）部下：あれ、部長でもおもちゃ屋に行くことなんてあるんですか？
　　部長：いや、めったに行かないんだけど、きょうは息子の誕生日なんだ｛#ジェ／Ø｝

(50) A：あれっ、なんであんなところに太郎がいるんだ？
　　B：きっと買い物にでも行くんだ｛#ジェ／ベナ｝（ナは文末詞、未分析）
(51) きのう、駅で太郎にあったんだ｛#ジェ／Ø／ズ｝。そしたら飲みに行こうかということになって、新しい店に入ったんだ｛#ジェ／Ø／ズ｝

(b) しかし、同じ下降調でも、強い下降調をとるヨ（以下、「⇓」で示す）は当該方言にもあり、その場合ヨは、共通語の「よ」と同様に、ヨに先行する命題の内容を、聞き手が認識すべき情報として、聞き手に強く提示するという働きをもつ（ただしこの用法は、当該方言に本来的なものか、共通語の用法が当該方言のなかにすでに定着したものなのか、あるいは筆者のなかで共通語の干渉を受けているところなのか、筆者の内省が不安定なところである。渋谷 2004: 173 の執筆時点では、このヨの用法は当該方言にはないと判断している）。たとえば、

(52) A：あれっ、彼女も行くの？
　　B：行く｛#ジェ／ヨ⇓｝。彼女が主催者なんだから当たり前だろ
(53) A：あれ～～、あんなところに学校あったっけ？
　　B：ある｛#ジェ／ヨ⇓｝。あの子が自転車で通ってたじゃないか。

といった発話がその例である。これらの発話においては、たとえAが発話時以前に「彼女は行かない」「あそこに学校はない」といった思い込みを抱いていたとしても、発話時点においては、話し手が目にしている状況がその思い込みに反することから、その思い込みはすでにゆらいでいる。(52) ではAは、聞き手から（ナイーブに）情報を引き出そうとし、また (53) では疑念を表示しているもので、確固たる思い込みの上にたって発話を行っているわけではない。このような場合には、ジェを用いることはできない。なお、

(54) A：君、外国行ったことないべ（「べ」は「だろう」に相当）
　　B：それぐらいある｛??ジェ／ヨ⇓｝

のような確認要求文にたいする答えにおいてもジェは使いにくい。この場合、Aが「べ」によって確認要求を行っているということからわかるように、Aには確信がなく、このことが、聞き手の思い込みを修正する働きをもつジェが不自然になることとかかわっているものと思われる。この点、

(55) A：君はまだ外国に行ったことはないから、むこうで誰か一人ボディーガードをつけようか
　　B：行ったことある｛ジェ／ヨ⇓｝

のように、Aが確信して述べ立てた思い込みを、ジェを使用してあからさまに修正しようとする発話とは異なる。なお、(55) や、次の、

(56) A：おまえはパソコンを持っていないから、俺のを貸してやろう
　　B：パソコンぐらい俺の家にもある｛ジェ／ヨ⇓｝

といった例のジェとヨのあいだには、§4.1.1 にあげた (41) の例と同じような意味の違い

があり、たとえば（56）のヨはあくまでも「自分の家にパソコンがある」ということを聞き手が知るべき情報として提示するものであるのにたいして、ジェはAのもっている「自分の家にパソコンがない」という思い込みに修正を要求するものである。

4.2.　ジェとズの異なり

文末詞ズは、「命題内容を聞き手に押し付ける（インポーズする）」といった意味機能をプロトタイプ的に表し、次のような特徴づけが可能な、聞き手目当ての伝達的なムードを表す形式である。

(a) 話し手の意見・考えはすでに確定している。
(b) 話し手は、聞き手も（一度は）それを認識したはずだと思っている。
(c) しかし実際はそう思っていない聞き手に、そう思わせる（押し付ける・訴えかける）ことをもくろむ。

ジェとズは、このうち (a) と (c) の特徴を共有するために、

(57) A：あした釣りに行こうかな
　　B：あしたは雨だ {ジェ／ズ}

のような会話のなかで使用された場合、類似の機能を担うものになるが、両者には、(b) の特徴において、大きな違いがある。ズの場合には、

(58) A：あした釣りに行こうかな
　　B：あしたは雨だ {#ジェ／ズ}。さっきも言っただろう？

のように、話し手Bは、先に一度同じこと（明日は雨が降るということ）を聞き手Aに伝え、聞き手Aもそれを承知した（と話し手Bは思った）といったコンテキストがなければ使用できないが、ジェにはそのような先行するやりとりは必要でない。ジェはむしろ、先に§3.1.1 で述べたように、直前の聞き手の発話のなかではじめて披瀝された聞き手の思い込みを、それに後続する話し手のターンにおいて修正するといった場合に使用されることが多い。

4.3.　ジェとバの異なり

文末詞バは、聞き手に聞き手の知らない情報を伝えるという点ではジェやヨと同じであるが、バは、さらに、

(59) 当該情報は、(a) 話し手が意外性をもって見出した／認識したもので、(b) 聞き手にとってもおそらく、聞き手の想定にはない／聞き手の想定とは異なる、聞き手が驚くにちがいない情報である。

といった、話し手と、(話し手の想定する) 聞き手の当該情報の受け止めかたに関する話し手の把握のありかたを、その意味としてもっている形式である。たとえば、次のような発話は、会話の冒頭でなされた場合（この点もジェの使用条件と相違する）、いずれも、話し

手が意外性や驚きをもって見出した事態であり、おそらく聞き手も驚くであろうと予想してなされたものである。

(60) 表に変な人がいる {#ジェ／バ}

(61) おいおい、おまえを写した写真に霊が写ってる {#ジェ／バ}

たとえば (61) の場合、話し手は、聞き手が写っている写真に霊が写っていることを驚きをもって見出し、それを、聞き手も驚くであろう情報として、聞き手に伝えている。

したがって、これらバをもつ発話が発せられたときには、聞き手から、「うそ！」や「へ～」、「あっ！」「え～？」といった驚きや疑いを表す発話を引き出すことが多い。

(62) A：おいおい、おまえを写した写真に霊が写ってる {#ジェ／バ}

B：え～～、ホントかよ

以上、バのもつ「話し手が意外性をもって見出し、聞き手もおそらく予想していない事態」といった使用条件は、ジェのもつ「聞き手がすでにもっている思い込みを修正する」という使用条件とは全く異なったものである。

5. まとめ

以上、本稿では、山形市方言の文末詞ジェを取り上げて、その用法を記述した。まとめれば次のようになる。

(a) ジェは、平叙文のみに後接し (§2.1)、文中では、テンス形式のタや報告形式ケのあとの位置に、またハなどの汎用の文末詞に先行して現れる、聞き手への伝達態度を表すモダリティ形式である (§2.2)。

(b) ジェの働きは、[[命題] ＋ジェ] のなかの [命題] で示される知識や情報が、聞き手が誤って認識しているものとは異なる正しい知識や情報であるとして、聞き手に提示するところにある。聞き手の思い込みを修正するといった発話機能を担うことが多い (§3)。

(c) 平叙文に後接して、聞き手に新規情報を伝達する他の文末詞 (ヨ・ズ・バ) 等とは、表面的にはほぼ同義で使用されているかに見えるケースもあるが、互いに異なった機能を担っている (§4)。

山形市方言においては、共通語では「よ」が担っている「聞き手が知っているべき情報として聞き手に示す」といった伝達態度を、共通語とほぼ同じ形と意味をもつヨ↑とヨ↓のほかに、それぞれ「正しい知識・情報の提示」「情報の再度のプッシュ」「驚くべき情報の提示」という特化された意味を担ったジェ・ズ・バ (さらにゼロ形式 (Ø)) が細かく分節して表現している、と、まとめることができる。

【参考文献】

国立国語研究所 (1978)『方言談話資料 (1) ―山形・群馬・長野―』秀英出版

渋谷勝己（1999a）「文末詞『ケ』―三つの体系における対照研究―」『近代語研究』第十集　武蔵野書院

――― （1999b）「山形市方言の文末詞ハ」『阪大社会言語学研究ノート』1　大阪大学文学部社会言語学研究室

――― （2000）「山形市方言の文末詞ズ」『阪大社会言語学研究ノート』2　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

――― （2004）「山形市方言の文末詞バ―ヨと対比して―」『阪大社会言語学研究ノート』6　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

――― （2008）「文末詞の長音化における語用論的機能―山形市方言を例にして―」今石元久編『音声言語研究のパラダイム』和泉書院

日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店

しぶや　かつみ（大阪大学大学院）

sbj@let.osaka-u.ac.jp